
マーリン・ラヴァンの冒険

白石薬子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マーリン・ラヴァンの冒険

【Nコード】

N8274J

【作者名】

白石薬子

【あらすじ】

私の名前はマーリン・ラヴァン。神霊カウンセラーだ
仕事を避け、愛弟子であり秘書であるレオナルド君といちゃいちゃしようとして、極寒の地に逃げてきたわけだが、そこでも珍客に恵まれた

薄幸田ススム氏

雪だるまである

彼は雪女相手に振られたと私に泣きついてきたのだ

『わたしがデブだから、彼女に振られたんです！』

『わたしが彼女のような身体になれば、きっとこの恋は上手くいきます!』

貴重な朝食を邪魔されて不機嫌な私は、彼の願いを言葉通りになえるために、一計を案じるのであった

私の朝は、遅い。

夜も遅い。

存分に寝てゆったりとしたベッドの上で身を起こすと、伸ばしっぱなしの髪の毛が私の額と頬を撫でていった。心地よい目覚め。時計を眺める。後三分で十時か。いい頃合だな。十時丁度に、レオナルド君が私のために熱い紅茶を用意してくれる。

「おはようございます、先生」

レオナルド君は、少年期から青年期へ移る男の子のかわいらしさと美しさを備えている。例えるなら、声変わりが始まった聖歌隊の少年のような美しさだ。彼が私の助手として一緒に暮らしてから、もう何年たつだろう。彼はとても優秀な助手で、飲み込みのよい弟子でもある。

そんな彼の手によって、作られた朝食。

分厚いトーストに、たつぷり塗られたバター。完璧な目玉焼きに、カリカリベーコン。薫り高い紅茶。新鮮なフルーツジュース。これらが全て私のために用意されたもの。そして甘酸っぱいやクルト。

「いいえ、ピルクルです。先生」

ゆっくりとそれを食べて、ごろごろしていると、笑ってみるともが始まる時間になる。タモさんの顔をみないと昼になった気がしない。昼にももちろん食事をとる。マーリン・ラヴァンの優雅な午後の始まりである。

窓の外を見る。

真っ白な雪だ。

しかも吹雪いている。

こんな中、世界中で誰かが働いている。

勿論、私以外の。

心が温かくなった。

暖房の充分利いたこの家は、冬と雪の砦に守られている。その上吹雪いてくるとなれば、わざわざ訪れる客はいない。天使だろうが悪魔だろうが、ここまで来たがるはずが無い。

代わりに私の部屋には、暖房がついている。雪国用の大きなヒーターだ。床暖房も万全。客が来なければ仕事が無い。仕事が無ければ働かなくてもいいわけで、こんなに楽なことは無い。

したがって私は、のんびり昼食をとり、ごろごろし、ごろごろしながら美味しく夕食をとると言う毎日を過ごすことができるのだ。幸せな生活とはまさにこんな日々のことを言うのだろう。満ち足りた気分でノックの音に答えた。

コンコン。

「どうぞ」

重々しく開く扉。そこからまず顔を覗かせたのは、冷氣だ。おお、寒い！ 私は思わず羽根布団を身体にまきつけ、そして。

「レオナルド君？」

眉を寄せて、声をかける。

銀色の盆と一緒に入ってきた人影は、とても満ち足りたとは言えない表情で、おはようございますの声もなく入ってきた。そして足で、バン！ とドアを閉めると、大きく息を吐いて、ぶるぶるぶると震えた。

その乱暴な仕草よりもまず私が気になったのは、彼の奇妙な服装にである。

「どうしたんだね？ そのかっこうは」

私の前に朝食を運んできたレオナルド君は、コートの上にコートを着、毛皮を羽織り、毛皮の帽子を耳までかぶってその上マフラーを巻くと言う重装備だった。彼のさらさらしたプラチナブロンドはすっばりと覆い隠されていて見えない。勿論、手袋もしている。白魚のような美しい指も見えない。

「カイロもつけています」

もう一度大きく呼吸をしてレオナルド君は言う。私は応接間に置かれていて、気持ちのよい暖炉の存在を思い出して。

「薪は？」と尋ねると。

「入っています。でも火がつけられません」

「暖炉がつけられないなら、ヒーターを入れればいいじゃないか」

「ヒーターはつけられません」

眉間に皺が寄る、レオナルド君。私は肩をすくめる。

「仕方ないな。私のベッドで温まっていくかい？」

「結構です」

「つれないな」

「それどころじゃありません」

レオナルドは、私の前まで運んできた朝食の乗った盆をぎゅっと押し付けて、ふーっと大きく息をついた。ふわ、と彼の身体にまとわりついた冷気が、私の側で解ける。ぞくつとした。

まあいい。

気分を取り直して、盆の上のご馳走を眺める。

いつも通りの分厚いバタートースト。半熟の目玉焼きに、炒まったベーコン。そして薫り高いアールグレイ。黄金色のアップルジュース。これらは全て。

「冷めているじゃないか、レオナルド君」

「ええ、冷めていますよ。冷めています。冷めていますけど持って来ました。ちやつちやつと食べちゃってください先生」

ひんやりと固いレオナルド君の声に、私は不平を唱える。

「食べちゃってくださいって、君ね。こんな冷めたものは食べられないよ。料理に必要なのは温度だよ」

「ああ、そう。ならいいです。早く着替えてください」

ぶつぶつ文句を私の前からさつと盆を取り上げて、この金髪の少年は私に、ゆっくりと噛んで含めるように言った。

「なにしろお客様がお待ちですから」

「お客様？ 誰のお客様だい？ こんな雪の中わざわざ喜んでくる客なんていないだろ」

「この雪の中、喜んで足を運んでこられるようなお客様です」

彼は朝食の盆を、枕元に置かれた椅子の上に置いて、今度は私を包む羽毛蒲団を剥ぎにかかると。けれどその動きは寒さのせい、その重装備のせい、かいつもより鈍い。だから私はぎゅっと彼の腕を掴んで、ベッドの中に引き込んだ。抵抗もほとんど出来ないまま、冷凍マグロのように倒れかかるレオナルド。わあ、と声を出した。

そのままぎゅっと彼の身体を抱きしめる。

うう。冷たい。

抱きしめるとますます彼の身体が芯まで冷え切っているのがわかる。

「なんだ君、ずいぶん固くなってるじゃないか」

「それは、暖房器具を全部止めていて、今この家中が寒くなっているからです」

「なんだね？ お客様がいるのに、暖房を切る必要は無いだろうレオナルド君。」

もしかして、凍てついた身体を暖めて欲しいって言う、山中遭難ブレイカイ？ いいよ、レオナルド君。君のことを僕で溶かして……」

ゴス。

そつと突き出した唇に答えたのは、彼の形のよい額である。鼻を巻き込んだ人中への頭突きに私は一瞬気が遠くなる。

「い、痛いよレオナルド君！」

「……いいから人の話を聞いてください、先生。いい加減とぼけるのは止めてください先生。このくそ寒い中に、わざわざ暖房器具消さなくちゃいけないお客様が、いらっしやっていますんです、先生。」

お仕事です。早く起きてください先生」

言葉尻に「先生」と連呼するようになっていた時は、彼の機嫌が悪くなっている証拠である。もう少し抵抗しようと思っていたが、

そろそろ観念することにする。

この雪山の吹雪の中、訪れた客である。

面倒なことになりそうだぞ。

何より第一の面倒は、私はその客のために、着替えて起き上がらなければならぬのだろう。面倒くさい。だから私は猫なで声で、レオナルド君に話しかけた。

「ねえ、レオナルド君。寒くないかい？」

「寒いです。ええ、寒いですよ。先生もいつものかっこうじゃ我慢できませんよ」

「……馬鹿な。私のスーツはクライアントに安心を与えるためのフォーマルなものだよ。あれを着なければ、私の仕事が始まらないと言ってもいい」

「ならそのフォーマルとやらに、さっさと着替えちゃってください」

「いやいや。その前にやらねばならないことは、まだ残っている」

私の言葉に、レオナルド君は怪訝な顔をする。

「やらねばならないことって、何ですか？ 先生」

「それはもちろん、凍えている助手と温め合うことだよ、レオナルド君」

「ちよ、ちよつと、先生！」

彼の抵抗など、私にとってはちよるいものなのである。自慢ではないが、私の自慢は脱がせることだ。自分が脱ぐことの次に脱がせるのは上手い。なぜなら脱がせることが私の仕事であり、天職なのだから。すると白い肌があらわになっていく。襟元まで伸ばされたプラチナブロンドが、シーツの上で咲いた。

「ちよつと！ や、やめてください、先生！！」

「何を言ってるんだ。冬山で遭難したときは、裸になって互いを温めあうものだよ」

「わけわかりませんよ！ 脈絡無さ過ぎです先生！！ こんなことしてなんか意味があるんですか！」

「あるさ！」

ふふふ。

含み笑いをしつつ、私はレオナルド君の耳元に囁く。

「かわいい君の身体を弄べば私は充分楽しい」

「わけわかんないですよ先生!!」

「師匠が弟子に、全身を使って手取り足取り教えようと言うのだ。

かわいがるのも教えの一つだよ」

「ちよつと! や、め、て、く、だ、さ、い」

「さあ、じつとして。天国を見せてあげよう」

「いつもそうやってなし崩し的に! 先生は自由すぎます!」

もがくレオナルド君を、私はそつと押さえ込む。

自由なものか、運命なのだ。弟子はかわいがってこそその弟子。そつとその細い首筋に唇を押し付けると、レオナルド君がびくつと震えた。

「……………うう。朝からこんな……………」

……………しよっぱなから、問題ですよ、先生……………」

ならば断言しよう。問題など無い!

アダムとアダムだろうと。アダムとイヴだろうと。百合だろうと

薔薇だろうと、私に問題は全く無い!

問題なのは客を待たせていると言う点だけだが、約束もとりつけず訪れたのだ、精精待っていてもらおう。仕事に入ってしまったら、来客はお客様になるかもしれないが、仕事に入る前はまだ見ぬ訪問者だ。仕事は出来るだけ先延ばし、それが私のモットーなのである。抵抗しながらも彼の真っ白い身体に、さつと朱が走る。触手取り扱い免許二級の腕が冴える。レオナルド君取り扱い免許があるなら、一級を頂戴できるだろう。

「やめ、てください。……………ってます」

「うん? どうしたんだい?」

「せんせ……………。……………られてますから、やめてください」

「どうしたんだい? そんなに恥ずかしがって。大丈夫、すぐ温めてあげるよ」

こちらもそつと甘く囁き返すと、ぎゅつと睨まれた。

「見られてるんですってば！ 先生！！
いいから。」

「は、早く着替えてください！！」

柔らかな羽毛蒲団をがばつと跳ね除けて、ドアの方を見る。蒲団から顔を出すと、息がすでに白い。開け放しのドアから廊下の冷気が流れ込んできているのだらう。開け放し？ いや、さっきレオナルド君は部屋のドアを閉めていたはずだ。では、どうして開いたのか？

その理由は、もう判っている。レオナルド君は言ったではないか。見られている、と。つまりこちらを覗いていたモノが、ドアを開けたに違いない。では一体誰が……？

それが誰だか、私にもすぐに判った。

そつと私達を覗いていた、真つ白な巨体と、目が合ったからだ。球体を二つ積み重ねたようなそれは、頭にかぶったバケツをとつて、微かに会釈を試みさせた。

「ああ！ 依頼者が溶ける！！」

レオナルド君が、私の部屋の暖房を慌てて消した。

2

私こと、マーリン・ラヴァンは神霊カウンセラーである。

私をその職につけた神霊とは、世界を支配している文字通り神霊達である。私は彼らの心の安定のために、神や悪魔や精霊と語るのだ。

「と、言うわけですね。先ほどはお見苦しい姿をお見せいたしました」

私は優雅に微笑んで見せる。耳が冷たい。指先が冷たい。しかしいつものフォームを崩したくない私は、やはりいつも通りスーツである。ふーっ口から漏れる息が、白い。

「先生、無謀すぎます」

レオナルド君に言われるまでも無く、すでに私は後悔し始めているが、着衣の内側にベタベタ貼り付けたカイロがその効果をフルに発揮してくれることを祈るばかりだ。手もかじかんでいる。私がいかに常人よりもタフな神霊カウンセラーだとしても、この寒さは骨身にしみた。

あれから私たちはすぐに着替え、私は朝食もとらずにこの目の前の雪だるまを相手にしているのだ。何故応接間が凍り付いているのかは、すぐに判った。この雪だるま氏の支払いは、この周辺の冷気なのである。

そんなものが料金の代わりになるのか？ この世界になじんでいない人間ならそうかもしれない。けれど自然のエネルギーを、貨幣代わりに使うのは、我々の世界では珍しいことではないのである。

意思の力や命の力を元にした、魂の通貨とは別の価値が、これにはある。自然界からそういう力を集めるのは、誰でも出来ることではない。

この応接間の凍りっぷりから見ると、依頼者は随分この相談に張り込んだのがよくわかる。それなら私も、その期待に早く答えねばなるまい。依頼を果たさない限り、この支払いに手をつけることは出来ないのだから。

寒さを抑えるために、別の場所にしまっておくことも出来ない。凍りついた我が家。つまりはそう言うことだったのだ。

が。
しゃべらない雪だるまほど、会話の手に負えないものは無い。ましてそれが空腹の時ならなおさらだ。

しゃべらない雪だるまのどこから、レオナルド君がこの雪だるまを、私のカウンセリングの客だと思ったのか判らない。そう言うところのドアを叩く変なモノは、大抵先生のお客さまじゃないですか

との答え。

納得したような。しないような。

気を取り直して私は固い顧客の口を、開かせるために会話を開始する。

「ご存知の通り、私は神霊カウンセラー。カウンセリングしたお客様の秘密は厳守いたします。どんな悩み事でも結構。決して他にはしゃべりません。神秘の法は、他人に漏らさないことがまず第一です。

自分がおかしいと思っではいませんか？ 変わっているとか？

そんなことはありませんよ。誰も特別なことなんて無いです。前にいたお客で、他者視線恐怖症の透明人間の方がおりましたね？ 自分が見えてるんじゃないかなんて言うんですよ、は、は、は、は、は「……先生、しゃべっちゃってますよ、お客様の秘密」

レオナルドのつつこみは、氷のように冷たい。しかし今日は室内のほうがはるかに冷たかった。二人の息は凍りつき、もはや冷気で青みがかかった応接間の中で、唯一の暖かさを示すものである。

その氷の世界の中、沈黙している雪だるま。

「りんごー。えー。りんごー」

林檎を売る林檎売りの、しゃがれた幻聴が聞こえるくらい、黙り込んでいる。もしあれが本物なら、きつと誰かがふざけて林檎売りの真似をしているだけなんだろう。

雪だるま氏の、眉、目、鼻、口は木炭で形作られている。

その単純な造形は、なかなか男らしい。

スノーマンと言うくらいだしな。

どっしりとした全身も頼りがいがありそうだ。

彼がかぶってきた帽子は、鉄製でがっしりしており、少しへこんだ後が見えるがちょっととした山高帽の装いで、今は帽子掛けにぶら下げた。両端につきたてられた棒には、色と形が違う手袋が一つずつ。なくした手袋の片方ずつを、彼の手に見立てたらしい。

なんでもいいから、早く話せよ！

イライラしてきた私に、レオナルド君が囁いた。

「もしかして、しゃべれないんじゃないですか？ 先生」
言われてみて気づいた。
そうか。

彼の真一文字に結ばれた口は、木炭で出来たものだ。それはつまりそれ自体では声が出せないと言う証拠以外の何者でもない。一本の木炭で出来た口がしゃべれるわけが無い。口が開かなければ、しゃべれるわけが無いではないか。今後雪だるまを作る人は、その口がきちんと開閉するように、最低でも二本の木炭を使っていたきたい。

しかし雪だるま氏は、我が忠実な助手の言葉が気に入らなかったらしく、その眉をぎゅっと寄せた。そしてその口をはずすと、どこから取り出したスケッチブックに大きく。

「わたしわ しゃべれます！」

と記入した。

頭痛がした。

寒さのせいだろうか。

ため息を咳払いでごまかして私は微笑んでみせる。

「それでは早く用件に入りましょう。どうしたんです？ ここに訪れたのは、何か深く思い悩んでのことのようにですが」

「よくわかりですね。さすがはせんせいだ」

「やっぱりそうですか」

ははは、と笑いながら私は腹の中で、悩み事があるからわざわざこんなところまで来たんだろうがお前は、と突っ込みを入れる。勿論そんな感情は表に出てこない。出てこないのは私のプロ意識からではない。すでに寒さで顔が凍りついているからだ。

「では、あなたの悩みを、早く、聞かせてはいただきませんか？

ええと、雪だるまさん？」

「薄幸田ススムといいます」

「では薄幸田さん、あなたは一体どんな悩みで？ まさかこの吹雪の中遭難したとか、そんなことじゃないでしょうね？」

嫌味を込めて尋ねると、ある意味そうかもしれません、と味な返答。

「そうなんですか？」

『そうなんです』

そう言ってから彼は自分の前に注がれたスピリタスを口にした。レオナルドが用意したこの酒は、別にこの客を酔わせようと思つてのことではない。強いアルコールでもない、この寒さに凍り付いてしまうからだ。アルコール度数の高さで揮発性が激しく、引火しやすいウォッカと噂のスピリタスだが、今この部屋で火を使わないなら構うものかと、レオナルド君がやけくそ気味で持ってきたのだろう。アルコール濃度九十六パーセントは伊達ではないのだ。

片や私達も一緒にスコッチを口に含む。ウイスキーを飲むのは、やはり寒さ対策と、ウォッカが苦手だからだ。とは言えこの寒さの中、味なんてほろんどわからない。ただ鼻の奥に微かなアイラ香がして、時間が少し過ぎると身体の奥からじわつと熱を感じる。私はレオナルドを差し招いて、彼にも飲ませた。ふう、と息をつくレオナルド。唇がかたかたしている。

私たちの姿を見てから、彼は「と」を並べて書いてみせる。図にする。

3

こうか。

「イコール三？」

『いえ、ためいきです』

つくづく芸の細かい雪だるまである。

『わたしの心は、いまやチヂにみだれた迷宮のよう。精神的迷子じようたいです。このおもいをなにかとわれれば、それは変としかいいようがないでしょう』

「そう言う状態を、人は変になったというのです」

妙に詩的な表現をする雪だるまになづいて見せると、彼は。ち

がいます、変のやまいです、と書く。そう言われればすぐに見当はつく。誤りはすぐに正したほうがよいと言つのは私の持論である。穏やかに訂正した。

「それは漢字が違いますよ」

『ああ、しつれいしました。こうでしたね』

鯉。

達筆に、部屋がまた一段と寒くなった。

3

薄幸田氏の話は、無意味に長いので簡単にまとめる。ひらがな交じり、誤字交じりの文章を読むのは、なかなか苦勞が伴う。しかも観念的で判りづらい。私たちがスモークサーモンをつまみに、ボウモア一本を開けた辺りでようやく話の全貌が見えたわけであるが、つまりはこういうことである。

薄幸田ススム氏は、去年の冬に作られた雪だるまなのだと言つ。作られてしばらくは、彼は幸せだった。しかし彼はわが身に置かれた運命を、すぐ悟る力を持っていた。

このままでは、暖かくなると溶けてしまう！

自分の命を守るためには、ここにはいけない！

気づいた彼はまだ寒い夜のうちに、雪だるまのための理想の土地を探して旅立ったのだ。作り出してくれた子供達の思い出と共に。

長い長い旅を続け、やがて彼はこの理想の土地に訪れる。それはどこあろう、ここ！ 私たちが住んでいるこの土地は、世界中の雪だるまが住む、雪だるまの理想郷であったのだ。

雪だるまが凍りすぎず、また、その雪を年中補充してくれる理想の土地。彼はそこで他の雪だるま達と暮らしていた。平和な日々。けれどその平和な日々を打ち砕く、強烈な事件が彼に訪れたのだ。

『彼女と、出あってしまったのです』

ある日彼は雪だるまの集落から、少し離れたステップ地帯まで足を伸ばしたのだそうだ。安住の地を見つけて、そのまま満足する雪だるまとは、彼は少し違っていた。

『ぼうけんが、すきなんでしょうね』

始めは里の周囲を巡ることで満足していた。それが徐々に範囲を広げ、裾野の森にたどり着くのに時間はかからなかった。そこは確かに年中冷え切った針葉樹の森ではあったけれど、きちんと四季が訪れる、雪だるまにとっては危険地帯だったのである。

『きつとわたしは、元来こうきしんがおうせいな雪だるまなのです』
彼はそう一人ごちる。

とにかく彼はそこで、一軒の家を見つけたのだそう。がっしりとした造りの家。自分を削ってくれた人たちのことを、ふと思いついてしまふような、人の暮らしのにおい。それは外の寒さを阻むような堅牢なもので、この寒い土地に住むは当然の代物であつたらしい。

『しかしわたしは気づいたのです！

外からはだんぼうしせつのとかがみえなかつたのです。

この寒い中、だんぼうしなしで生活するのはにんげんにとってじさつこつうい！ つまりこれは寒さから身をまもるためではなく、外のあつさをしゃだんするためにつくられた家だったのです！！！！』

どうでもいいけれど、ひらがなが多い文字は読みにくい。

何より長文になると、スケッチブックに書かれる文字も小さくぎゆうぎゆうづめにして書くので、さらに読みにくい。

寒さにうつらうつらしてきたレオナルド君の頬を軽く叩いて覚醒させながら、私は彼の話に首を傾けた。

興奮してきた彼の文字が、斜めに下がっていくからである。

『それでも私はようじんおして、ものかげから家をさぐりました。もしにんげんだったら、おどろかせてしまいますし、へたをしたら、こわがられてこわされてしまうかも、しれませんから。

家のまわりには、つつましいかきねとささやかな花だんがありましたから、それにすがたをかくして、その住人をさぐったのです』
その巨体を隠すほどの花壇や垣根は、多分ささやかと言うには及ばないだろう。もしくは気づかれていたかどうかどちらかだ。まあ、森の中とは言え雪もつもっていただろうから、見つかったもただの雪の塊に見えたのかもしれない。

『家のドアが開きました。一目でそれがじよせいだとわかりました。な、なぜなら、か、かのじよは、いっしまとわぬすがただったのです!!』

そして彼はその美しさに思わず鼻水、いや、鼻血を吹いたのであった。

彼が出会ったのは、雪女であった。

雪だるまにとって理想の土地は、雪女にとっても理想の土地だったのである。

それから彼は毎日のように彼女の家に通った。

もう春が訪れるぎりぎりになっても、その地から立ち去りきれなかったのだ。彼が元の山に戻ったのは、このまま春を迎えて溶けてしまえば、二度と彼女と会えないからである。雪だるまのエデンは、もはや彼の約束の地ではなくなってしまった。思うことは、彼女はまたそこに住んでいるのか、なにかの拍子で溶けてしまっただけなのか、一人ぼつちで寂しくは無いか、そんなことばかりである。苦しい春、身悶えする夏、焦燥の秋が来て、ようやく待望の冬が来たわけだ。

『かのじよは、一年前と変わらないすがたで、そこにいました』

まだ暖かい冬の始まり。彼は駆けた。駆けて駆けて、薄幸田氏は彼女の元にたどり着いた。暖冬の予報が外れたのが、彼にとっては幸運だったろう。

彼は自問自答する。

彼女の存在こそが、自らにとっての美のアイデアそのものであるのなら、それが在ることそのものを神の存在の証明とし、その一事

を以つて観念世界の中に永久に留めることで満足すべきか。それともあえて我が心の底を明かし、願わくばその精神の錘に過ぎない肉体を使つて、決して交わり合わぬ唯物のカクテルにより、悦樂のネクターを作るべきか、と。

「つまり、片思いで終わるか、つきあつて一発やるか、どっちがいいかつて、これしよう？」

レオナルド君の舌がもつれるのは、寒さのせいだけではなく、酔いのせいも大きいだろう。

「告つちやえはいいじゃないですか」

「それがうまくいかなかったから、そつだんにきているんじゃないですか！！」

わつと泣き出す薄幸田氏。彼の目からは驚くことに涙がこぼれている。彼の恋の炎を自らを溶かしているのでなければ、それはさつきから彼があおっているスピリタスのせいに違いない。そう言えばスピリタスの瓶は、もう二本目が空けられようとしている。

「だいたい、さつきからお二人はいちやいちゃして。二人でそんなによりそつて、見せつけてるじゃないですか！！ さつきだつてふとんのなかで、あ、あ、あんなことしようとして！！」

「いやあ、今は部屋が寒いからよりそつているだけです」

さつきは冷たかつた弟子を温めようとしただけですよ」

『うそだツ！！！！』

能天気な笑う私に、薄幸田氏は決め付ける。

どうも酒癖がよくないらしい。泣き出す雪だるまは、黙り込む雪だるまよりもたちが悪い。

ふん。

酔いが回つてご機嫌になつてきたレオナルド君は、いまや私にべつたり身体を預けて、雪だるまを挑発している始末だ。

「はい、先生、あーん」

いや、スモークサーモンはもういい。レオナルド君。

酔つ払つてからみついてくるレオナルド君は無視して、私は彼に

説得を図る。確かにまとわりついてくるレオナルド君は嬉しいが、やはり寒い。まとわりつくのが嬉しいのは、やはり暖房を目一杯入れた暖かい場所だ。その為にはこの邪魔な依頼人を片付ける必要があるのだ。

「まあ、レオナルド君の言うとおり、彼女に自分の想いを伝えたいほうがいいと思いますよ？　好きだと言われて、嫌な気持ちになることは無いと思いますし」

『そんなことはありません』

「どうして？」

『わたしが……だからです』

文字が小さすぎてもはや読み取れない、彼のスケッチブックである。この寒さで細かい文字を読むのは難しい。私はその部分を読む苦労よりも、はっきりと彼の考え方を聞きたかった。むしろ自分の心の障害を大きな声で（この場合は声ではないが）主張することこそが、治療のステップアップにつながるのだ。本来ならもう一度時間を置いて、ゆっくりと心をほぐしていくところだが、この雪だるまに何度も付き合っていたら、命が幾つあっても足りない。あえて強く押してみる。

さあ。

さあさあ、さあ！！

『…ブだから』

「もっと大きい文字で！」

『わたしが　ふとって　いるからです！』

「先生」

「何かね？　レオナルド君」

「雪だるまにも、デブとかあったんですね」

しみじみと言うレオナルドに、私は、それは違うよ、と優しく答えた。

古今東西、痩せている雪だるまは存在しない。

雪像ならその限りではないだろうが、彼らは雪だるまなのである。小さな雪だまを転がし、あるいは盛り付けることで出来上がる存在である。とすれば必然その姿は小山のようにならざるを得ない。その形こそ彼らの実存なのである。背の高い雪だるまはいても、痩せた雪だるまはいないのである。

「でもねえ。その丸々した身体がいいと言う人だっているんじゃないですかね？ 一概に痩せた人が趣味という人ばかりではありませんよんよ？」

『そんなこと言つて、お二人はやせているじゃありませんか！ やせてる人はみんなそういふんですよ！！』

雪だるまであるから、ダイエット出来るわけでもない。雪だるまは、この形だからこそ雪だるまなのである。それが雪だるまの悲哀と言わずして何と言おうか！

『じつはわたしは、もう告白してるんですよ』

一年越しの再会に、彼はもう自分の気持ちがい慢できなかったのだ。自分の家に初めて訪れた異界の客。彼女はとても喜んだのだそうだ、はじめのうちは。

『でも、わたしの好意をしるうちに、かのじよのかおがくらくなくていったんです』

ある日彼女は雪だるま氏に問うたのだそうだ。

私のこと、好きなの？

雪だるま氏は、始めはごまかしながら、けれど最終的には彼女へ気持ちを打ち明けたらしい。

それに対しての彼女の台詞は。

「ごめんなさい」
だったのだった。

あなたのことは、とても好きよ？ 雪だるまの中では一等好きかもしれない。でもあなたが……あなたの身体がダメなの。こん

なこと言うのはとてもつらいけれど、私あなたの身体を愛することは、出来ないの。

お友達でいましょう。

彼女の言葉に、薄幸田氏は苦しんだ。

『わたしの身体が嫌。それはつまり、私がデブなのが嫌と言うことです』

「なんだ、よくある話じゃないですか」

レオナルドの何気ない言葉は、大抵容赦が無い。

「そんな、身体つきがどうかで決めるような女はろくな奴じゃないですよ。そんな女はさっさとあきらめて、別の人を探したほうがいいですよ？」

『ちがいます!!!』

ぐりぐりと木炭をスケッチブックにねじりながら、彼は猛然とまくし立てる。その量はページ二枚に至った。

『いいですか？ かのじよはわたし自身は好きだといってくれたわけです。』

それなら私がデブじゃなくなれば、少なくともこの身体でなければ、かのじよは心からわたしを好きだといってくれるでしょう!?

ちがいますか？』

「あー」

私は泣面を作る。

恋愛を断られた者は、大抵そう言う勘違いをしている。

相手に断られた直接のだけが、お断りの原因であると思ひ込もうとするのだ。

実際にはその理由にはさまざまな複合要素があつて、全体的にダメで、その中で一番ダメな部分を強調しただけと言うことも往々にしてあるのである。いわばお断りの中の思いやりと言おうか。大体面と向かつて「あなた嫌い」とは中々言いがたいものだ。

お断りの言葉が、その人物の本質に近づけば近づくほど、そのダメージは大きくなる。

とりわけ「私男の人って、苦手なの」と言うのは強烈だ。

何をどうやってても、自分の恋愛は実らないと言うダメ出しをされたも同然だからだ。例えば性転換したとしても「あなたのその男っばさが残つてるところがダメなの」と言われてしまえば終わりだ。

そもそももし本当に好きな部分が多くて、ダメな部分が一点しか無かったら、そのダメな部分は我慢して付き合おうと言うのが恋愛の形である。

正直「私男の人は好きになれないの」と言われてしまうのは、どうしろって言うんだと頭を抱えざるを得ない。微妙な気持ちになる。私も経験が三度あるので、よくわかる。

だから彼には大いに同情をしてあげたい。

彼が雪だるまである以上、彼は痩せることは出来ないのだ。仮に彼の身体を削れば、それは確かに痩身につながらるかもしれないが、その時は彼の存在を加工可能な雪の塊としたことになり、雪だるまたる彼の存在は失われてしまう。残るのはただの雪像だろう。雪だるまだった彼は死んでしまうのだ。

かと言って、痩せようと言う努力は彼の場合、雪だるまである以上不可能なのだ。先も述べたとおり、雪だるまはあの形だからこそ、雪だるまなのである。

痩せると言う行為は、努力のしようでなんとかなりそうに思える分、雪だるまにとって、性別を理由に断られるよりもはるかにダメージが大きいに違いない。

けれどほつきり言おう。

私はそろそろこの話に飽きてきた。

大体恋愛相談に来るやつは、終わったことを、或いは始まってもないものを、どうにかしてくれという連中ばかりだ。

大抵自分で行動しない。失敗したら、誰かが助けてくれれば何とかなると思っっている。

踏み出せない、失敗した理由に外見を嘆く相談者は、大抵自分の内面は完成されていると思っっている。

「性格にも問題があるし」と言う相談者も同様だ。性格に問題がある自分を、きちんと理解している理知的な自分がいると勘違いしている。

確かにそんなコンプレックスは誰もが持っているものだが、同時にどこかで自分の薄ら寒さを自覚しているものなのだ。そう、大抵は。

普通のカウンセリングであれば、その狭い意識を徐々に外に向けるよう、医者と患者が努力しあって新しい道を見つけていくのが仕事である。

しかし、そんなのは面倒くさい。

そもそも私は神霊カウンセラーである。

その辺をすつとばした治療行為こそ、私の本領なのだ。

ためしに水を向けてみる。

「媚薬でも出しましょうか？ 彼女の心を、あなたに向けるように」

『そんな薬物を使って、相手を自由にしようなんて思いません！！』

「じゃあ、忘れますか？ 彼女のこと。そうすれば今の苦しみからは逃れられますよ」

『忘れたくありません！ 私はただ、かのじよのような姿になりただけなんです！！』

デブでその上、このからだじゃ……！！』
なるほどね。

その上この身体じゃ、と言う彼の言葉に少しひっかかりを覚えたけれど、私はこの一連の流れから一つのひらめきを得た。

もう幾度目になるかわからないけれど、したたる鼻を拭いてもう少し彼を挑発する。

「そう言っつて、彼女のような美しさを手に入れても、ビクビクしちゃっつてえ。

告白なんて出来ないんじゃないですか？」

『何言っつてるんですか！！ かのじよと同じようになれば、わた

しはきつとつけいれてもらえる！ もういちど告白します！ 告白
しますよ！！』

わたしの妻はかのじょしかいないんです！！

彼の望みはよくわかった。

私は会心の笑みを浮かべて、助手に命じる。

「レオナルド君、すぐに支度をしてくれたまえ。術具、シモンの鉄板を使う」

「判りました。タイプAですね？」

シャキッとソファから立ち上がる、レオナルド。

酔いと寒さでへろへろになりながらも、私に仕事を言いつけられ
たらずくに助手としての顔を取り戻すレオナルド君はとても優秀だ。
けれど惜しいかな。

今日は私の意図を汲みきれなかったらしい。私は彼の言葉に大き
く首を振って。

「違うよ、Eだ」

と命じた。

Eですか？ と疑い深く見つめるレオナルドの視線に私は気づか
なかつたふりをする。

『EとかAって、なんの話ですか？』

薄幸田氏の不安そうな文字に、私はにっこり笑って答える。

「何、後に作られたか、先に作られたかの番号ですよ。Eは後期型
という意味です。Aは前期型でしょうか？ プロトタイプ？ まあ
本当はどちらが先かなんて論じるだけ無駄なことです。

「鶏と卵の関係みたいだね」

かの偉大なる魔術師シモンが作り上げたと言う装置である。
一見拷問器具にも見えるその機械は、偉大なる変換装置であり、
古代からの秘宝なのだ。

「毎日その日々を我らは
煉獄の鉄板の上で焼かれる
あにはからんや」

棺のような鉄の箱に刻まれたラテン語の警句。私はそのふたを開
けて、呼びかける。

「さあ、薄幸田さん。」

これが私の用意した処方箋です。

これを使ってあなたの身体をプレスし、神の肉体に近づけるので
す。形無き者に神の似姿たる人の形に作り上げる装置が、このシモ
ンの鉄板なのですよ」

『タイヤキの金型みたいにみえますね』

「まあそんなものだと思ってもらっても、構いませんよ。これはあ
なたのイメージしたとおりの身体に、あなたの身体を変えるもので
す。」

あなたが雪だるまの姿を捨てて、彼女と同じ人の姿を手に入れた
のなら、この装置しかありません」

どうですか？ 試しますか？

私の言葉に異論のあるうはずが無い。

彼は進んで中に入る。好奇心が旺盛な、冒険家のだ。

私はゆっくりと扉を閉める。

「スイッチを入れますよ？」

私は言うが早いか、すぐにスイッチを入れた。

ジジジジ、とシモンの鉄板が稼動しはじめたところで、レオナル
ドが私に冷たい視線を向ける。

「どうしてE型なんて用意したんですか？」

「なにか問題でも？」

「問題でも、つて！ 先生判ってやってるでしょ！」
声を上げるレオナルドが何を非難しているのか、私は判りすぎるほど判っている。しかしだ。

「私は薄幸田さんの言葉どおりにしただけだよ。レオナルド君」

「……先生の悪魔」

「やだなあ。私はただのカウンセラーだよ」

シモンの鉄板は、形の定まらない精霊や力に、自分が望むような人型の姿を与えると云う便利な道具である。そもそもこの道具は魔術師シモンが、形無き土くれや、水などに心を宿らせ、自らの下僕とするために作ったものである。その性能の高さは、天界魔界を驚かせた。

形定まらぬものに、人の身を与えんとする装置。

そしてついに、この鉄板をむやみに開閉しないよう、天使長じきじき裁可が下った。なぜならこの装置は、開け閉めするだけで、空気人間が山のように生まれてしまうからだった。

とは言え、入れるものがあるならば、その心配はないし、この道具なら雪像のような材料として、薄幸田氏をみなすことなしに、新たな姿を与えることが出来る。

魂のこもった雪だるまというのは、つまり人造の精霊とでも言ったようなものだ。少々乱暴な解釈だが、これによって薄幸田氏が消滅したりするようなことはないはずだ。魔方陣を重ねて新しい悪魔を創り出すよりかはよほど穏当な手段と言えよう。

ガタン。

装置がその役目を終えた音がする。ガタンという音は、キーロツクが外れた音である。私はその鉄の扉を開きながら、中の薄幸田氏に声をかける。

「いかがです？ どんな気持ちです？ まったく新しい自分になっていると思いますか、いかがですか？」

中から出てきた薄幸田氏を見て、レオナルドが喉の奥で、ひ、と

声を上げる。私はしり込みする彼に微笑みかけて命じる。

さあ、レオナルド君、鏡を用意して差し上げて。

「こ、これは……」

驚きの声が、その唇から漏れる。一本の棒ではなく開閉する唇となった依頼者の口は、もうしゃべることが可能だ。見た限りでは何の異常も見出せない。まさに完璧な出来である。

黒炭のような瞳、彫りの深い鼻と意思を感じさせる眉。黒々とした髪は、ゆるいウェーブを描いている。身に纏っているのが、両手にはめられた手袋だけと言うのがなんだかエロティックだ。薄幸田氏が気にしていた腹回りは、すっきりと解消されている。とは言えその象徴であつた球体は身体の一部にどうしても残っているのだが……。

「これが、私、ですか？」

「いかがですか？ あなたの望み通り。あなたの想い人と同じ身体ですよ」

驚きの声に満足しつつ、私は晒った。

そこに立っていたのは、もはや彼と呼ぶにはふさわしくない姿をした依頼者だったからだ。

丸みを帯びた腰、そして乳房、肩。一人の女性が、鏡を見ている。変わり果てた自らの姿を見て。

これから薄幸田氏が、何を言おうと私は知ったことでは無い。大体この吹雪の中、アポイントメントも取らずにやってくるような非常識な客である。その結果相談事が愚にもつかない恋愛相談だと言うなら、構わない。好きにやらせてもらおう。

シモンの鉄板。

Aはアダム型。

Eとはイブ型。

私は彼に、そのE型を使って見せたのだった。

「悪意以外の、何でもないですね」

レオナルド君が肩をすくめて見せる。彼がそれ以上私を責めないのは、責めたところで私が反省しないことを知っているからだ。

「さあ、いかがですか、薄幸田さん？ もうその身体になったからには、元の身体には戻れませんか？ あなたは永遠にその身体のまま生きるのです。いかがですか？ お気持ちは？」

がし、と身体がつかまれる。
しまった。

薄幸田氏の反応を確かめようと近寄りすぎたのがまずかったのか、私は肩をつかまれてしまう。

レオナルド君はこんな時、決して助けてはくれない。高みの見物を決め込むのだ。いや、もしかしたら楽しんで見ているのかもしれない。彼は私が早々死なないとたかをくくっているのだ。

予想されうる衝撃に備えて目をつぶる。

けれど起こるであろう私への一撃はいつまでたつても訪れない。そつと目を開けると、そこには瞳に一杯の涙を溜めた依頼者がいた。そして。

「先生！」

「つつつつつめたい！」

ぎゅっと抱擁される。もう冷たさに身体の感覚は麻痺したつもりで居たけれど、甘かった。あわてて、ごめんなさいと身体を離す薄幸田氏の目は、けれど感謝に満ちていた。

「先生、ありがとうございますっ！！！」

「はい?!」

呆然とする私に、彼女はこらえきれなくなったのか、涙をぼたぼたとこぼす。私はしどろもどろになりながら。

「いや、あの、さつきもう元の身体に戻れないなんていいましたけれど、手がなわけではなくてですね……」

てつきりなじられ怒鳴られるであろうと思っていた私は事の変化についていけない。

けれど元雪だるま氏はそんな私に向かって、何故元に戻る必要があるんですか？ と問うた。

「私は、遂に望んでいた身体を手に入れることが出来たんですよ！
彼女と同じ身体！ この柔らかな胸、くびれたお腹。そして細い足。そしてこの美しさ」

「はあ」

「これならきつと、彼女のハートを射止めることが出来ます！」

「え？ いや、ああ、それはそれなら、まあ」

「それじゃあ早速、彼女にもう一度告白しに行きます！！ ありがとうございます
とうございました、先生！！」

涙のしずくを振りまきながら、彼、いや、彼女は帽子掛けに掛かっていたバケツを取り、頭にかぶると、吹雪の中飛び出していく。
その姿はすぐに白い世界の中に溶けていった。

もし吹雪に閉じ込められた不幸な登山者がここに居たら、氷点下の世界を駆けていく裸女を見たかもしれない。しかしあなたの気が触れたわけではないのだ。気を確かに持って、ビバークして頂きたい。

吹き込む雪を払いながらようやく雪国特有の二重扉を閉め終わると、レオナルド君が首をかしげて問う。

「先生、応接間に残ったままの支払い、どうしますか？」

「どうもこうも。くたくただが片付けなきゃならんだろ。片付けない限りこの寒さは収まらん。今暖房入れると、溶けてしまうからね」
時計の針は十時をさしたままである。どれもこれも寒さに止まって使い物にならないのだ。私はその労働報酬を見てため息をつく
と、レオナルド君に命じた。

「とりあえずスコップと、魔法の財布だ。そう、あの無尽蔵の財布。あの中に全部詰めてしまおう。一仕事終わってから、応接間の暖炉に火をともして食事だ。熱い紅茶を入れてくれるね？ レオナルド君」

「どうして薄幸田さんは満足したんですかね？」

あの応接間の焼失事件から数日して、レオナルド君が私に尋ねた。何故レオナルド君がその話題を数日避けていたかと言えば、その話題を出すと私の機嫌が悪くなることを知っていたからである。

薄幸田氏がこぼしていった涙のスピリタスが、揮発しきっていないかと思ったらしく、暖炉に火を入れたとたんに勢いよく燃えた。幸い小火で済んだが、冷気を閉じ込めていた財布はその被害にあって、せつかく汗をかいて集めた労働報酬が全てパーになってしまったのだ。自然のエネルギーは、扱いがデリケートなのだ。

以来、私の機嫌は悪い。煤だらけの応接間には、足も踏み入れていない。

今でもその不機嫌が癒えたとは言えないが、レオナルド君の骨折りも効いて、私はようやくあの日を振り返ることが出来るようになった。

その為の温かい朝食。

そしてうさぎのヘアバンドをつけたレオナルド君。

彼の笑顔と、食前酒代わりの白ワインとで、なんとかあの日のそのむかむかも飲み下せそうだ。

ちぎったトーストを目玉焼きの黄身に浸しながら私は。

「さあね」

と答えた。

「幾らでも解釈のしようはあるさ。」

薄幸田氏は、彼女こそが美のアイデア云々言っただらう？ あれはつまり、彼女の美への嫉妬だったのかもしれない。恋愛成就より身体の変化の方が、重要だったのかもしれない。

「女性にされてしまっても、ですか？」

「うん。」

彼が彼女に、恋愛感情を持っていたのも、事実なんだろうよ。け

れどそれは、彼女を手に入れるより、自分が彼女になりたかった欲求から出たかもしれない。

そうでなかったとしても、自分を振った相手を見返してやりたいという気持ちはあったのかもしれないね。彼女以上に美しい彼女になろう、と。

とすれば、男の身体よりも、女の身体の方が彼にとって都合がよかったのだろうよ」

薄幸田氏は、彼女自身になりたかったんだ。

心情の告白、その否定。

雪だるまであることを全面否定された薄幸田氏は、自分も雪だるまである自分を否定する。その果てにあるのは、否定者への同化願望。それを実現できるのなら、性別など関係なかったのだろう。

そして自分の生まれのままの姿を否定し、新しい自分を手に入れることで、元々の自分の精神の核に変化は無いと言うことを証明してみせる。

それは自己否定の試行錯誤であり、強烈な他者との同一化欲求だ。自分にだけ科せられる、精神と肉体に与えられる苦行と、その狭間にあるナルシステイックなエクスタシー。

デブがどのと言う問題ではなかったのだろう。

彼は女の姿が欲しかったのだ。

「まあどうであったとしても、客が満足して帰ったのならそれで充分じゃないか。その心の底をあれこれ暴くのが、私の仕事じゃない。そもそもカウンセリングとは、客の望む心のあり方を、客の制御できる形で与えることが仕事なのだ。客の望んだものを与えられれば、それでよい。

少なくともあの肉体は、機能的には前のものより劣っていたとは思わないし、スピリタスだってこぼしたりはしないだろうよ」

むっと不機嫌が強くなった私に、レオナルド君は自分の頭につけ

たうさぎ耳を微かに曲げて見せて。

「えへ」

と笑った。私はうさみみと、この笑顔に弱いのだ。

まあ確かに。

私はレオナルド君を抱き寄せて考える。心の通い合ったパートナーを持つことは至上の喜びである。私が彼に容赦ない判断を下すのは、今私が満たされているせいかもしれない。持つものが、持たざるものを笑う。優越感からくるものかもしれないと考えて、私は自嘲した。そんな私の首筋に指を這わせながらレオナルド君は。

「でも先生」

と口を開く。

「もしかしたら、薄幸田さんは、本当に彼女のことが好きだったのかもしれないですよ？　好きだったから、純粹に彼女みたいになりたいと思つて、その望み通りになれたから喜んだのかもしれないです。」

だからあの姿になつて、もう大丈夫と思つたのかもしれないですよ。これで本当に彼女と一緒にになれるつて。

だとしたら」

「だとしたら？」

「薄幸田さん、少し、かわいそうだな」

「それだつて、自己愛からのものかもしれないじゃないか」

「そうだとしても、大好きな人みたいになりたいって気持ちは、一概に否定できないですよ。例えそれが不可能であつても。子供が姉や兄や、父母みたいになりたい気持ちみたいに。上司を敬愛する部下のように。師匠を尊敬する、弟子のように」

最後の言葉がなんとなく聞き取りにくかつたけれど、はっきりと聞こえた。

師匠を尊敬する、弟子、だつて？

ふふ。

私はその揚げ足を取るつもりは無い。

「え？ 最後、なんて言った？ なんて言ったの？ レオナルド君」
「う、うるさいですよ！ 先生！！」
「しつこく聞き返すだけである。」

「うざいですよ！ 先生！」

ひとしきり戯れた後、私はプラズマテレビのスイッチをつけた。
人魂型の古いプラズマテレビだが、まだ大事に使っている。

ああ、もう笑ってみるとも時間だ。

いつもの軽快な音楽と共に、司会のタモサンが現れる。いつも通りのいつものダンス。この笑ってみるともは、私たちがお昼ごろに見れる手ごろな番組があればいいな、と言う欲求が産み出した共同幻想だと聞いたことがある。我々がお昼のまったりした時間を捨てたとき、私たちはこの共同幻想の全てを失ってしまうのだと。

「明日もまたみてくれるかな？」

「見るとも！」

この掛け声が絶えたときに、番組の終わりなのだ。

応援するよ、たまさん。

私の穏やかな日常のために。幸せな、毎日のために。

「あ」

「どうしました先生？」

ベッドの足元に置いたテレビの画像を見て、私は固まってしまふ。
怪訝な顔で覗き込んだレオナルドは。

「ゲ」

と言って、やはり固まった。

笑ってみるともの冒頭にある、いつものコーナー。

以前は魔方阵で次々と有名人を呼び出す、お招きの輪のコーナーだった時間帯。今ではそのコーナーが少し後にずれて、視聴者参加型の視聴者判定コーナーが挿入されている。今日のテーマは。

『成型美人さん、いらっしやい』

「あ、あれは」

「まさか」

まさかでもなんでもない。

「いやあ、成型されたなんて、とても思えないねえ」

とタモサンに言われているのは、誰あるうあの薄幸田ススム氏であつた。

胸に飾られたプレートには「薄幸田ススム」と書かれている。改名したらしい。そしてその隣にいるのは、ススム氏とどことなく面影の似た女性の姿。

「はい。わたしもびっくりです。でも、この写真見てください」

他人の空似であることを祈っていた私に、無慈悲な判決が下る。

彼女が手に持つている写真は、間違いなくあの雪だるま氏の顔だ。

そしてその頭にかぶったバケツと、はめられた手袋。

「別人じゃないですか」

タモサンは驚く。会場は珍しく静かだが、私はその静寂に、嫌な予感があつた。静かなのに、盛り上がっているのがよくわかるのだ。声に出さない、観客たちの気配。

「奥さんは、以前のご主人の姿が嫌いだったって聞いたけど、本当？」

タモサンの切り込んだ質問に、ススム氏と腕を絡ませた清楚な笑顔を浮かべた女性が、はい、と答えた。

「だって私、女の人の方が好きなんですもの」

それを聞いた薄幸田氏がはにかんだ。

「わたし、てつきりデブが嫌いなんだって思ってた」

「柔らかいのは、好きよ？ 誤解しないでよ。もう」

「ほんと？」

「ほんと。ずっとあなたが私と同じだったら、そう思ってた。

ごめんね？ 女の子になつて、不便してない？」

「わたしは、前からずっとかわつてないよ。」

それに、今の身体の方が、前よりずっと気持ちいいから、いいよ」
二人は見詰め合つて微笑んで、それからそつとキスをした。

突然タモサンの顔がアップになる。

「いやあ、二人の愛を成就させた神霊カウンセラーの先生！ すばらしいですね！」

「幸せそうで、よかつたじゃないですか」

なんとなく棒読みで、レオナルド君が言う。

「ようやく薄幸田さんが、僕と先生がよりそっているのを羨ましかった理由が判りました」

そうなのだ。

私は髪を伸ばしていると言っても男性に見えるし、レオナルド君も中性的とは言えきちんと男の子に見える。薄幸田氏はただ私たちが仲良くしていることに嫉妬したわけではない。同性同士でいちゃついているのが、羨ましかつただけなのだ。

けれど私はそんなことよりも、この後に訪れるであろう心配ごとに意識がいつてしまっていた。そしてそれはタモサンの。

「他にも、薄幸田さんみたいな身体が欲しいって雪だるまの方、たくさんいらっしやるんでしょう？」という言葉ではっきりした。

「はい」

明るく、そして無責任にうなづく薄幸田さん。

「やっぱり雪だるま同士で抱き合うの、難しいですからね」

その意見はもつともだ。今画面の二人は、しっかりと絡みあっている。画面の外の私たち二人は、寄り添って固まっている。

「じゃあ、そのすばらしいカウンセラーの先生の居場所は、ぜひとも聞きたいですね？ 皆さん？」

司会タモサンの振りに、ざわざわした空気が会場中にあふれる。

テレビカメラが会場を舐めるように撮ると、そこに並んでいた一面の雪だるま達が嬉々としてスケッチブックを振っているのが、見えた。

『聞きたい』

聞きたい聞きたい聞きたい。

聞きたいです。

「それじゃあ、先生の家におじゃましても、いいかな?!」
私はもう画面を見ていなかった。見なくても彼らがスケッチブックに何を書き込んでいるのか、よくよく承知していたからだ。

とんでもない。

ごめんだ。

あの会場中のおびただしい雪だるまが、シモンの鉄板を求めて我が家に押しかける。あの番組を見ていた雪だるまたちも、こぞつて家に押しかけるだろう。そして押し込められる代金代わりの冷気。平穏な日常の崩壊。儲かるうがなんだろうが、毎日仕事をしないといけない日常なんてまっぴらごめんだ!!

いつそシモンの鉄板を雪だるま達にくれてやろうかとも考えたけれど、その考えはすぐに却下した。あれは操作は簡単だが、仕組みをきちんと知っていないと、メンテナンスできない。おまけにとても高価なものなのだ。ほいほい貸したりあげたりできるものではない。

「レオナルド君」

「はい」

「引越しの支度だ」

「お任せください先生。朝飯前です」

切り替えの早い弟子は、頼もしい。しゃっきりと立ち上がった弟子は、さあ、先生着替えてください、と私を促した。

「ああ、判ってるよ。手伝うって。しかし私は君と違って動くのに少し時間が要るんだ。そんなに急かさなくても……」

私の年寄りじみた言葉を、レオナルド君が鼻で笑う。

「何を言ってるんですか、先生。あの日から、このことあるを予想して、いつでも引越しできるようにしてあります」

「おお！」

「それも今日の朝終わってます！」

「朝飯前だな！」

「朝飯前です!!!」

よく引越すことになるなんて予想がついたね、と私が言うと、レオナルド君は少し寂しい笑顔で。

「いつものことですからね」

と笑った。

そう。私、マーリン・ラヴァンは神霊カウンセラーである。神、精霊、悪魔、妖精、その他諸々の超常現象達。私は彼らの心の平安を授けるために、己の知恵を使う魔術師なのだ。

その仕事に、決して安息の日は訪れない。

楽園を追われた人の身に、エデンは永遠に訪れないのだから。

「こんな私でも、ついてきてくれるかい、レオナルド君」

「どうでもいいですから、早く着替えてください、先生」

笑いかける私の頭に、レオナルド君はうさみみのヘアバンドをそつとかぶせた。

*

そんなわけで、私マーリン・ラヴァンの冒険は、新たな始まりを告げた。

それはきつとこれからも続くことになるであろう。きつと。多分。その冒険の数々は、知られて、また忘れられ、そしてまた思い出されて繰り返されるのだろう。思い出したように送られてくる、年賀はがきのように。

私がこの日のことを思い出したのもそんな年賀はがきのせいだった。あの事件はもう十年以上前の話になる。今ではもう懐かしい。

あけましておめでとございます。

二ヶ月遅れで届いた年賀はがきには、薄幸田婦妻と、その娘二人が映っていた。

その娘の一人は薄幸田氏に似ていて、もう一人は奥さんによく似ている。

「どちらがどちらの娘だと思うね？ レオナルド君」

私は彼に声をかける。彼は今傍らにいない。私は一人、寝室ではがきを眺めているのだから。

一人ぼっちの、寝室。

私は大きくため息をつく。

都会にふるみぞれ交じりの、雨。人肌が恋しくなる二月。

時計が、朝の十時を告げる。

同時に、ノックの音。

「どつぞ」

私は大きく伸びをする。

開いたドアから、紅茶のいい香りが、した。

了)

(後書き)

読了感謝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274j/>

マーリン・ラヴァンの冒険

2010年10月8日15時05分発行